
全学に広がる震災への取り組み(2)

(森山美知子ほか、広島大学 東日本大震災・福島原発災害と広島大学、2013、p.61-64)

2014年5月23日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

今回私が担当したのは「全学に広がる震災への取り組み」というテーマをもとにした4人の専門家の論文であった。大きく分けて、東北大震災後の

- ① 健康面のケアについて
- ② 中四国ブロック被災地医療支援について
- ③ 医療スタッフ（理学療法士）の不足について
- ④ 神経内科常勤医の不足について、
であった。

① 健康面のケアについて

大学院医歯薬保健学研究員の森山美和子教授は、宮城県石巻市と福島県南相馬市にて、感染症の看護、健康チェック、慢性疾患管理、リハビリテーションを行ったという。中でも私自身が特に印象に残ったのは、うつ・PTSDのスクリーニングテストを行っていることと、血圧測定の前待ちの時に、苦難や不安などを話されていることだった。もちろん、東北大震災の被災地は医療スタッフが不足しているため、県外から派遣された医療スタッフが健康管理をすることがもちろん大切であるが、身体的な健康と同様、あるいはそれ以上に深くにある精神面の健康のケアが非常に重要な役割を担うであろうと、私自身が目にしたわけではないが、強く感じた。PTSDは心理学の中でも歴史が浅く、先週回った実習での指導医の先生も学生時代に習ってはいないと言っていた。Post-Traumatic Stress Disorderの略で、日本語では心的外傷後ストレス障害と訳すこの疾患は、よくASD（急性ストレス障害）と混同されがちだが、実際に大きく違う点がある。それが、その疾患に苦しめられる長さである。ASDは1か月未満に対して、PTSDは1か月以上である。また、東北大震災で再注目されたPTSDは、実際に被災した人だけでなく、支援や救助に携わったボランティアスタッフや警察・自衛隊関連の人にも影響を及ぼしている。仮設住宅においては、部屋は非常に狭く、プライバシーもないがしろになっている。家族はバラバラになり失業し、これまでの日常を破壊された中で、活動を作り出すことは困難で明らかに生活を取り戻すための根本的な支援がなければ解決には至らない。しかし、これらに対して、動くことが必要とわかっているにもかかわらず、県外スタッフである以上常にかかわることができないことに限界を感じているという。

② 中四国ブロック被災地医療支援

岩手県の病院に、中四国地方の各大学病院から2週間ごとに整形外科医を派遣し、被

災地医療の支援を行う取り組みである。整形外科の有名疾患である変形性膝関節症、変形性脊椎症、骨粗鬆症、腰部脊柱管狭窄症などが6割を占めていたという。ただ、新本先生は、訪問リハビリなどの在宅医療は初めてであったという。

③ 理学療法士の不足

③では、南相馬市のリハビリテーションのスタッフの不足に対する、理学療法士のボランティアとしての派遣についてだった。この論文で印象に残ったことは、ボランティアの基本的な約束として挙げられた二つである。「患者さんと病院スタッフに笑顔で対応する」と、「常勤理学療法士の負担を楽にして不必要な負担をかけない」ことであった。特に後者では、読んだ4つの論文の中で唯一、向こうの現地スタッフに対する配慮が書かれていた。ここで、気づかされたのは、準備ができていない状態でボランティアや支援スタッフとして派遣されても、被災地サイドの余計な手間をかけてしまうことがあるということだった。

④ 神経内科医の不足

④では専門医の不足が挙げられていたのは、一般内科の先生方が専門でない分野の診療をよぎなくされているため負担が大きく、神経内科常勤医の必要性を痛感したという話であった。

これらの論文を読んで感じたのは、震災などの自然災害はいつ起きるかわからない。その起きた後に、私自身も3年次の夏に同級生と先輩と東北にボランティアに行く予定を立てたが、実際にはいかなかった。学生の自分が一人で行っても何も変わらないと考えてしまったからだと思う。看護師、理学療法士、整形外科医、神経内科医それぞれの先生方の論文を読み、医療スタッフで専門が違って、そして、医療の中でも初めて経験することがあっても、様々な角度からのアプローチで震災後のケアをされていたことに感銘した。ただし、中途半端な知識や、技術でいくのではなく、被災地支援として1週間や2週間という短い期間派遣されるだけであっても、それに対する準備は何より必要かと考える。災害支援は被災者の広い意味での健康面のケアやそこで働く医療スタッフの過労を考え、阪神淡路大震災、東北大震災からもっと専門として確立して医学部の授業などでもっと取り入れていくべきだとも考えた。災害が起きてからではなく、何より準備や予習が大切だと考えるに至った。